

リリース 9.3.1.1

Oracle® Data Integrator Adapter for Hyperion®
Essbase® - System 9 ユーザーズ・ガイド

ORACLE | Hyperion

Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbase - System 9ユーザーズ・ガイド, リリース9.3.1.1

部品番号: E06149-01

2008年5月

原本名: Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbase-System 9 User's Guide, Release 9.3.1.1.0

原本著者: Data Integration Management writing team

Copyright © 2008, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとし、著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるとしてプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

OracleはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がありません。

このプログラムは、第三者のWebサイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者のWebサイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

1. Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbase の概要.....	3
用途.....	3
統合プロセス.....	3
アダプタの使用.....	4
2. 環境の設定	5
データ・サーバーの定義.....	5
物理スキーマ、論理スキーマおよびコンテキストの定義.....	7
3. Essbase アプリケーションのリバースエンジニアリング	11
リバースエンジニアリングとは.....	11
Essbase リバースエンジニアリング・ナレッジ・モジュールの使用方法	11
4. ロードおよび抽出.....	19
データ統合タスク	19
Essbase 対応の問合せおよびスクリプトを使用したデータ抽出	20
インタフェースの作成.....	21
メタデータのロード.....	22
IKM SQL to Hyperion Essbase (METADATA).....	23
データのロード.....	25
IKM SQL to Hyperion Essbase (DATA)	26
データの抽出.....	29
LKM Hyperion Essbase DATA to SQL.....	30
メタデータからのメンバーの抽出.....	32
LKM Hyperion Essbase METADATA to SQL	33

1

Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbaseの概要

この章の内容

用途.....	3
統合プロセス.....	3
アダプタの使用.....	4

用途

OracleのHyperion Essbase - System 9用のOracle Data Integrator Adapterを使用すると、Oracle Data Integratorを介してEssbaseを事実上あらゆるソースまたはターゲットと接続および統合することが可能になります。このアダプタは、Essbaseアプリケーションで、メタデータおよびデータのロードおよび抽出とデータの計算を行うためのOracle Data Integratorナレッジ・モジュール (KM) のセットです。

Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbaseのマニュアルでは、ユーザーにOracle Data Integratorの使用経験があり、すべてのマニュアルにアクセス可能であることを前提としています。Oracle Data Integratorの最新のマニュアルは、Oracle Technical Network (OTN) のWebサイト

(<http://www.oracle.com/technology/index.html>) の「Documentation」領域からダウンロードできます。

統合プロセス

注意:

Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbaseのインストール手順は、アダプタに付属している『Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbase Readme』を参照してください。このReadmeドキュメントは、Oracle E-Deliveryからダウンロードすることもできます。

Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbaseを使用すると、Essbaseアプリケーションに対して次のデータ統合タスクを実行できます。

- メタデータおよびデータのロード
- メタデータおよびデータの抽出

アダプタを使用したメタデータまたはデータのロードや抽出は、次のタスクで構成されています。

- 環境の設定: Essbaseテクノロジーのインポートと、データ・サーバーおよびスキーマの定義

詳細は、第2章「[環境の設定](#)」を参照してください。

- リバースエンジニアリング・ナレッジ・モジュール (RKM) を使用した Essbase アプリケーションのリバースエンジニアリング

詳細は、第3章「Essbaseアプリケーションのリバースエンジニアリング」を参照してください。

- ロード・ナレッジ・モジュール (LKM) を使用したメタデータおよびデータの抽出
- 統合ナレッジ・モジュール (IKM) を使用したメタデータおよびデータの Essbase アプリケーションへの統合

アダプタの使用

Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbaseを使用する際、次の Oracle Data Integratorの機能を利用します。

- トポロジ・マネージャ: Essbaseアプリケーションへの接続を定義するために使用します。

詳細は、第2章「環境の設定」を参照してください。

- デザイナ: 次のタスクのために使用します。
 - データストアへのメタデータおよびデータのロード (このデータストアは、Essbaseのディメンションおよびデータ表を表すターゲット表です。)
 - データストアからのメタデータおよびデータの抽出 (このデータストアは、Essbaseのメタデータおよびデータを表すソース表です。)

Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbaseには、データストアを作成する Essbase RKMが組み込まれています。

デザイナで、Essbase RKMを使用してデータストアを作成します。

アダプタには、他にデータのロードおよび抽出のための次のナレッジ・モジュール (KM) が組み込まれています。

- KM_IKM SQL to Hyperion Essbase (METADATA): ステージング領域からアプリケーションにメタデータをロードします。詳細は、23ページの「[IKM SQL to Hyperion Essbase \(METADATA\)](#)」および22ページの「[メタデータのロード](#)」を参照してください。
- KM_IKM SQL to Hyperion Essbase (DATA): ステージング領域からアプリケーションにデータをロードします。詳細は、26ページの「[IKM SQL to Hyperion Essbase \(DATA\)](#)」および25ページの「[データのロード](#)」を参照してください。
- KM_LKM Hyperion Essbase DATA to SQL: Essbaseアプリケーションからステージング領域にデータを抽出します。詳細は、30ページの「[LKM Hyperion Essbase DATA to SQL](#)」および29ページの「[データの抽出](#)」を参照してください。
- KM_LKM Hyperion Essbase METADATA to SQL: Essbaseアプリケーションのディメンションをステージング領域に抽出します。詳細は、33ページの「[LKM Hyperion Essbase METADATA to SQL](#)」および32ページの「[メタデータからのメンバーの抽出](#)」を参照してください。

2

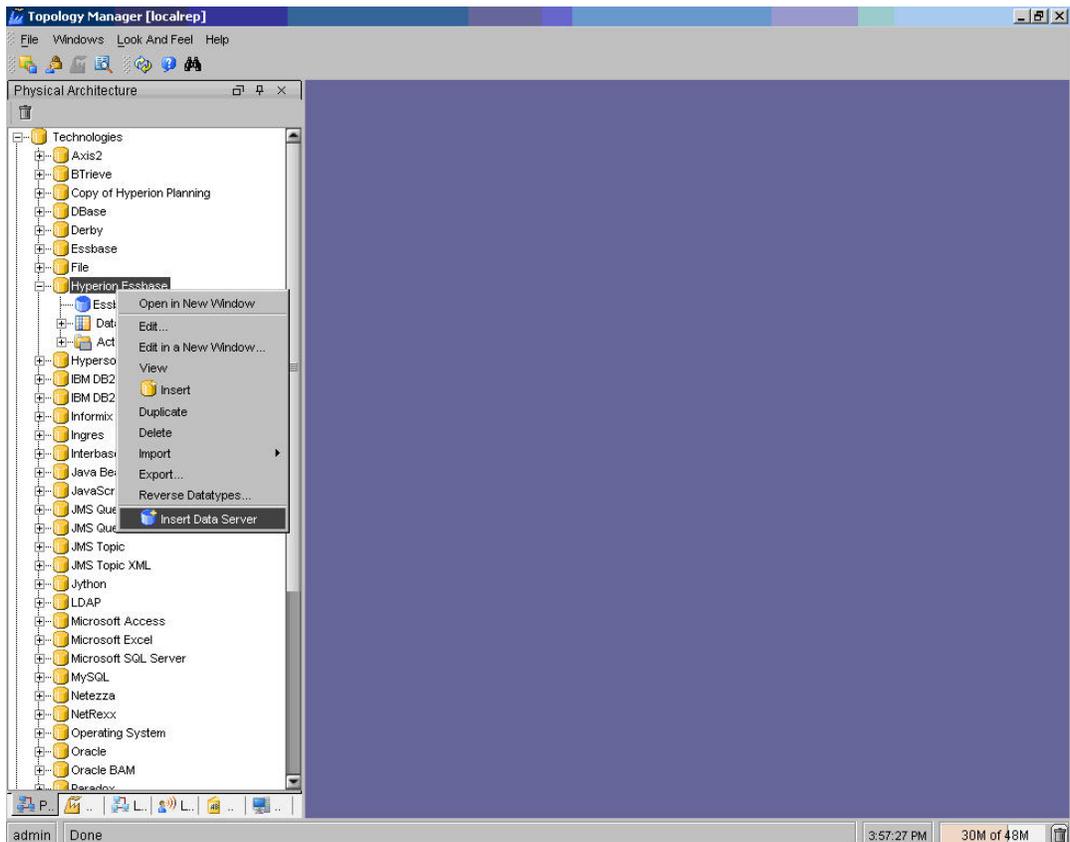
環境の設定

この章の内容

データ・サーバーの定義.....	5
物理スキーマ、論理スキーマおよびコンテキストの定義.....	7

データ・サーバーの定義

- ▶ Essbase サーバーに接続するためのデータ・サーバーを定義するには、次のようになります。
- 1 トポロジ・マネージャで、「テクノロジー」を開きます。
 - 2 Hyperion Essbaseを右クリックして「データ・サーバーの挿入」を選択します。



注意:

Hyperion Essbaseテクノロジーがマスター・リポジトリに定義されていない場合は、「impexp」フォルダからインポートできます。

「データ・サーバー」が表示されます。

The screenshot shows a configuration window titled "Data Server: EssbaseServer". It has several tabs: "Definition", "JDBC", "Properties", "Version", "Privileges", and "FlexFields". The "Definition" tab is selected. The window contains the following fields and controls:

- Name:** A text box containing "EssbaseServer".
- Technology:** A dropdown menu showing "Hyperion Essbase".
- Server (Data Server):** A text box containing "localhost".
- Connection:** A section containing:
 - User:** A text box containing "admin".
 - Password:** A text box containing "*****".
 - JNDI Connection:** An unchecked checkbox.
- Array Fetch Size:** A text box containing "30".
- Batch Update Size:** A text box containing "30".

At the bottom of the window, there are five buttons: "OK", "Cancel", "Apply", "Help", and "Test".

3 「定義」で、次のようにします。

- a. 「名前」に、データ・サーバー定義の名前を入力します。
- b. 「サーバー（データ・サーバー）」に、Essbaseサーバー名を入力します。

注意:

Essbaseサーバーがデフォルト・ポート（1423）以外のポートで稼働している場合は、<Essbase Server hostname>:<port>の形式でEssbaseサーバーの詳細を指定します。

- c. 「接続」に、Essbaseサーバーに接続するためのユーザー名およびパスワードを入力します。
- d. 「OK」をクリックします。

注意:

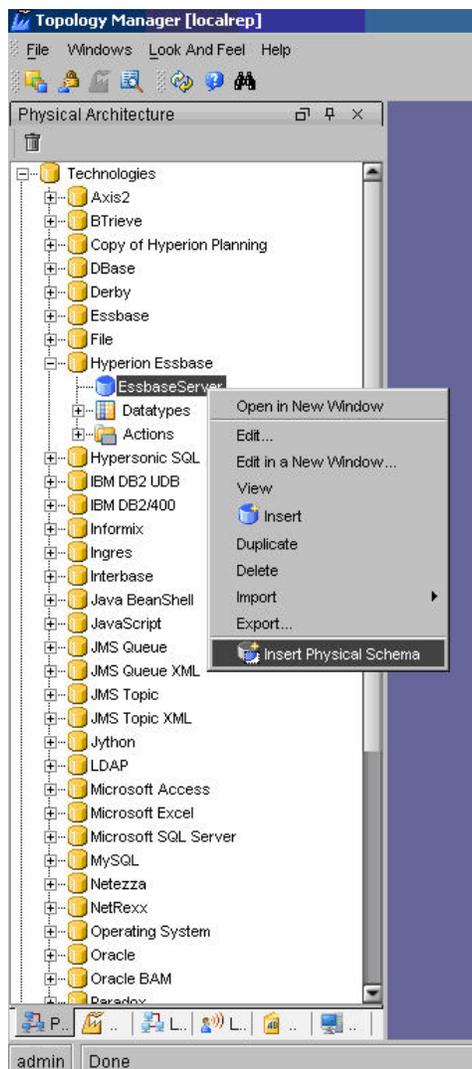
Essbaseのデータ・サーバー接続に対して「テスト」ボタンは機能しません。このボタンが機能するのは、JDBCドライバを持つリレーショナル・テクノロジーに対してのみです。

物理スキーマを定義するためのページが表示されます。詳細は、7ページの「[物理スキーマ、論理スキーマおよびコンテキストの定義](#)」を参照してください。

物理スキーマ、論理スキーマおよびコンテキストの定義

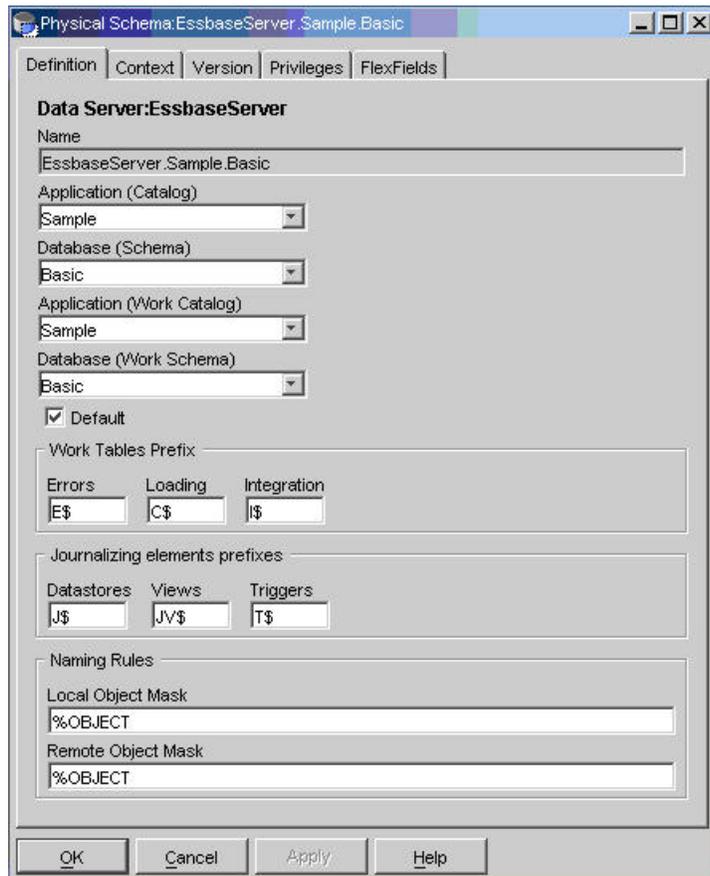
データ・サーバーの下に、アプリケーションに対応する物理スキーマと、モデルのベースとなる論理スキーマを定義します。Oracle Data IntegratorおよびAdapter for Hyperion Essbaseでの作業は、論理スキーマを使用して行います。コンテキストは、論理スキーマと物理スキーマのリンクに使用します。

- ▶ 物理スキーマを作成するには、次のようにします。
- 1 トポロジ・マネージャで、Essbaseのデータ・サーバーを右クリックし、「物理スキーマの挿入」を選択します。



物理スキーマ・ウィンドウが表示されます。

図1 物理スキーマ定義



- 2 「物理スキーマ」の「定義」タブ(図1)で、「アプリケーション (カタログ)」および「アプリケーション (作業カタログ)」にEssbaseアプリケーションを指定し、「データベース (スキーマ)」および「データベース (作業スキーマ)」に選択したアプリケーションに関連付けるEssbaseデータベースを指定します。

図1で指定されたアプリケーションはSample、データベースはBasicです。

- ▶ 新しい物理スキーマの論理スキーマおよびコンテキストを指定するには、次のようにします。

- 1 物理スキーマ・ウィンドウの「コンテキスト」で、次のようにします。

- Essbaseの論理スキーマが1つ以上存在する場合は、コンテキストおよび論理スキーマを選択します。
- Essbaseの論理スキーマが存在しない場合は、次のようにします。
 - a.  をクリックします。
 - b. 左列からコンテキストを選択します。
 - c. 右列に論理スキーマの名前を入力します。

2 「OK」をクリックします。

選択または作成した論理スキーマが、選択したコンテキストで物理スキーマと関連付けられます。

物理スキーマ、論理スキーマおよびコンテキストの詳細は、『Oracle Data Integrator ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

3

Essbaseアプリケーションのリバースエンジニアリング

この章の内容

リバースエンジニアリングとは.....	11
Essbase リバースエンジニアリング・ナレッジ・モジュールの使用法	11

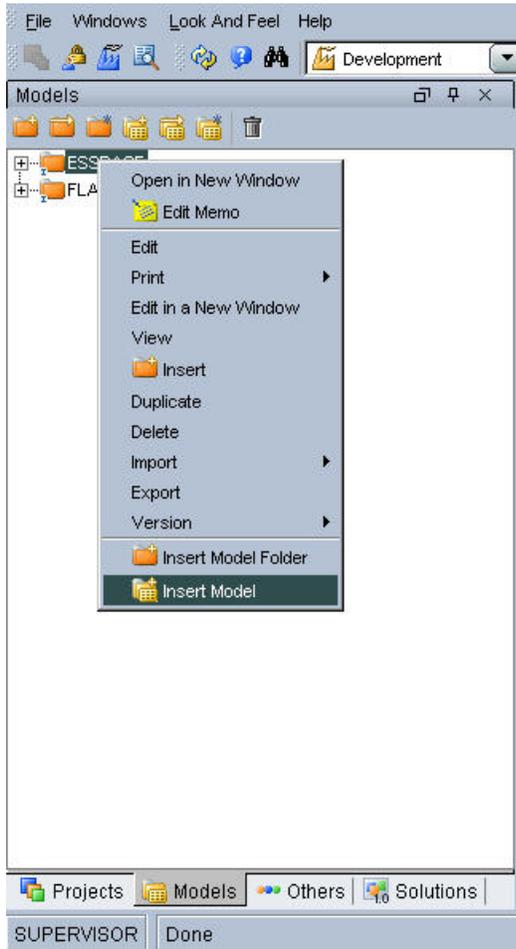
リバースエンジニアリングとは

Essbaseアプリケーションをリバースエンジニアリングすると、Oracle Data Integratorモデルが作成されます。このモデルは、アプリケーションの各ディメンション用のデータストアおよびデータ用のデータストアで構成されます。リバースエンジニアリング、モデルおよびデータストアの詳細は、『Oracle Data Integratorユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Essbase リバースエンジニアリング・ナレッジ・モジュールの使用法

アプリケーションをリバースエンジニアリングするには、Oracle Data Integratorデザイナーを使用します。デザイナーの詳細は、『Oracle Data Integratorユーザーズ・ガイド』を参照してください。

- ▶ Essbase アプリケーションをリバースエンジニアリングするには、次のようにします。
 - 1 デザイナーで、「Essbase」モデル・フォルダを作成します。
 - 2 「Essbase」を右クリックして、「モデルの挿入」を選択します。



モデル・ウィンドウが表示されます。

Model: New

Journalized Tables | Markers | Services | Memo | Version | Privileges | FlexFields

Definition | Reverse | Selective Reverse | Control | Journalizing

Name
Hyperion Essbase Sample

Code
HYPERION_ESSBASE_SAMPLE

Technology
Hyperion Essbase

Logical Schema
Hyperion Logical Schema

Action Group
<Generic Action>

Default Folder
...

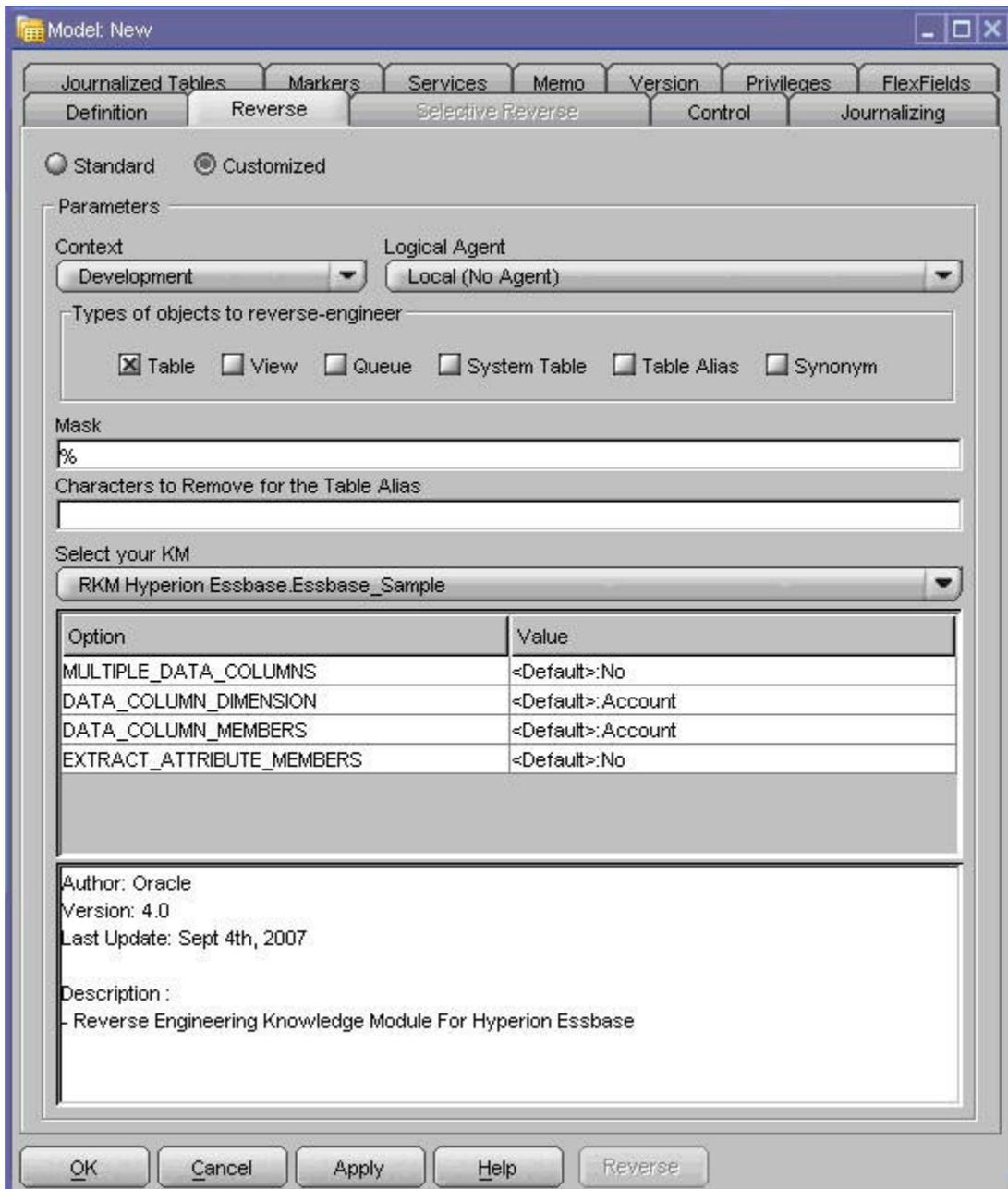
Display the Metadata changes in the Model tree

Description

OK Cancel Apply Help Reverse

- 3 新しいモデルの名前を入力してHyperion Essbaseテクノロジーを選択し、(未設定の場合は)モデルのベースとなる論理スキーマを選択します。

図2 モデル・ウィンドウの「リバース」タブ



- 4 「リバース」(図2)で、次のようにします。
 - a. 「カスタマイズ済」を選択します。
 - b. コンテキストを選択します。
 - c. 使用可能なKMのリストからHyperion Essbase用のRKMを選択します。
 - d. 次のようにリバースエンジニアリング・ナレッジ・モジュール (RKM) のオプションを指定します。

オプション	指定可能な値	説明
MULTIPLE_DATA_COLUMNS	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	<p>このオプションをNoに設定すると、データ抽出/ロード・モデル用に作成されるデータストアは、各標準ディメンション用の1つの列と1つのデータ列で構成されます。</p> <p>このオプションをYesに設定すると、データ抽出/ロード・モデル用に作成されるデータストアは、DATA_COLUMN_DIMENSIONオプションで指定されたディメンションを除いた各標準ディメンション用の1つの列と、DATA_COLUMN_MEMBERSオプションのカンマ区切りのリストで指定された数と同数のデータ列で構成されます。</p>
DATA_COLUMN_DIMENSION	Account	<p>このオプションを適用できるのは、MULTIPLE_DATA_COLUMNSがYesに設定されている場合のみです。</p> <p>データ列ディメンションの名前を指定します。</p> <p>たとえば、データ列は、ディメンションAccountやTimeなどに分散しています。</p> <p>DATA_COLUMN_MEMBERS</p> <p>Account</p> <p>このオプションを適用できるのは、MULTIPLE_DATA_COLUMNSがYesに設定されている場合のみです。</p> <p>必須のデータ列メンバーをカンマ (,) で区切ります。</p> <p>たとえば、データ列ディメンションをAccountに設定し、メンバーを「Sales,COGS」と設定した場合、データ抽出/ロード用のデータストアは、データ列ディメンションを除いた各ディメンション用の1つの列と、カンマ区切りの値で指定された各データ列メンバー用の1つの列で構成されます。次に例を示します。EssbaseアプリケーションのディメンションがAccount、Scenario、Product、MarketおよびYearで、データ列ディメンションをAccountと指定し、データ列メンバーを「Sales,COGS」と指定した場合、データストアは次の列で構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> Scenario (String) Product (String) Market (String) Year (String) Sales (Numeric) COGS (Numeric)

オプション	指定可能な値	説明
EXTRACT_ATTRIBUTEMEMBERS	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	<p>このオプションをNoに設定すると、データ抽出/ロード・モデル用に作成されるデータストアは、各標準ディメンション用の1つの列と1つのデータ列で構成されます。属性ディメンションは含まれません。</p> <p>このオプションをYesに設定すると、データ・モデルは次の列で構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 各標準ディメンション用に1つの列が作成されます。 MULTIPLE_DATA_COLUMNオプションの値に応じて、1つ以上のデータ列が作成されます。 関連する各属性ディメンション用に1つの列が作成されます。

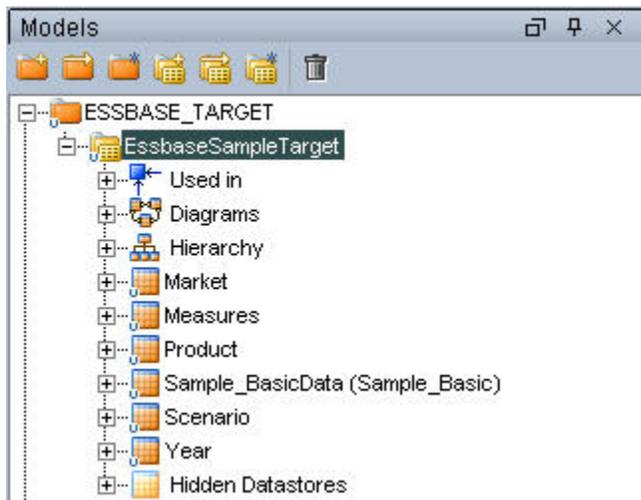
- e. 「リバース」をクリックします。
- f. 「実行」で、「OK」をクリックします。
- g. 「情報」で、「OK」をクリックします。

5 入力内容の確認を要求されたら、「はい」をクリックします。

RKMが（論理スキーマおよびコンテキストによって特定される）アプリケーションに接続し、アプリケーションのディメンションに応じて、次のデータストアの一部または全部をインポートします。次のデータストア・リストは、EssbaseアプリケーションSampleおよびデータベースBasicの場合のものです。

- Market: Marketディメンションのロード用
- Measures: Measuresディメンションのロード用
- Product: Productディメンションのロード用
- Scenario: Scenarioディメンションのロード用
- Year: Yearディメンションのロード用
- Sample_BasicData (Sample_Basic) : アプリケーションSampleおよびデータベースBasicからのデータのロード用

リバースエンジニアリングで発生したエラーは、Oracle Data Integratorオペレータにリスト表示されます。オペレータの詳細は、『Oracle Data Integratorユーザーズ・ガイド』を参照してください。



4

ロードおよび抽出

この章の内容

データ統合タスク	19
Essbase 対応の問合せおよびスクリプトを使用したデータ抽出	20
インタフェースの作成.....	21
メタデータのロード.....	22
IKM SQL to Hyperion Essbase (METADATA).....	23
データのロード.....	25
IKM SQL to Hyperion Essbase (DATA)	26
データの抽出.....	29
LKM Hyperion Essbase DATA to SQL.....	30
メタデータからのメンバーの抽出.....	32
LKM Hyperion Essbase METADATA to SQL	33

データ統合タスク

Oracle Data Integratorでは、Essbaseアプリケーションのメタデータまたはデータのロードや抽出は、次のタスクで構成されています。

- データストア用のインタフェースの作成
- (オプション) 1プロセスで複数のインタフェースを実行できるようにするための、インタフェースのパッケージへのチェーン化
- インタフェースの使用

詳細は、21ページの「[インタフェースの作成](#)」を参照してください。

インタフェースの作成およびパッケージへのチェーン化の手順は、『Oracle Data Integratorユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Essbase対応の問合せおよびスクリプトを使用したデータ抽出

Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbaseでは、データ抽出のために、次のEssbase対応の問合せおよびスクリプトをサポートしています。一般的なプロセスとしてデータを抽出するには、抽出問合せを作成してアダプタに指定します。アダプタによって抽出問合せの出力が解析されてステージング領域に移入される前に、列の検証が実行されます。

抽出問合せは、検証時のメタデータ出力問合せの結果に基づいて実行されます。出力問合せの実際の解析は、列の検証結果が正常な場合にのみ行われます。

抽出が完了すると、結果が検証され、抽出問合せによってすべての出力列に対するデータが抽出されたことが確認されます。

次のEssbase対応の問合せおよびスクリプトを使用して、データを抽出できます。

- レポート・スクリプト
- MDX問合せ
- 計算スクリプト

レポート・スクリプトを使用したデータ抽出

レポート・スクリプトによって生成されるレポートを解析して、データを抽出することができます。レポート・スクリプトは、Oracle Data Integratorがクライアント・コンピュータ上で稼働し、Essbaseがサーバー上で稼働している場合、クライアント・コンピュータおよびサーバー上に配置できます。レポート・スクリプトを使用したデータ抽出では、列の検証は実行されません。そのため、レポート・スクリプトの出力列は、ソース・モデルの対応する関連の列に直接マップされます。ただし、レポート・スクリプトを使用してデータを抽出するには、次のタスクを完了しておく必要があります。

- レポート・スクリプトでのすべての書式設定を抑止します。レポート・スクリプトの最初の行として、行{ROWREPEAT SUPHEADING SUPFORMAT SUPBRACKETS SUPFEED SUPCOMMAS NOINDENTGEN TABDELIMIT DECIMAL 15}を挿入します。
- レポート・スクリプトによって作成される列の数は、ソース・モデルの関連の列と同数以上である必要があります。
- 列のデリミタ値をLKMオプションで設定する必要があります。

MDX問合せを使用したデータ抽出

MDX問合せは、XMLベースのデータ抽出メカニズムです。MDX問合せを指定して、Essbaseアプリケーションからデータを抽出できます。ただし、MDX問合せを使用してデータを抽出するには、次のタスクを完了しておく必要があります。

- ディメンションの列名は、Essbaseキューブのディメンションと一致する必要があります。
- Type 1データ抽出の場合、すべてのデータ列名は、1つの標準ディメンションの有効なメンバーである必要があります。

- Type 1データ抽出の場合、データ・ディメンションをより下位レベルの軸、つまり列の軸 (0) に配置することをお勧めします。より下位レベルの軸に指定しない場合は、メモリー使用率が高くなります。
- 列がソース・モデルの対応する属性ディメンションと関連付けられている場合、MDX問合せで同じ属性ディメンションを選択する必要があります。
- MDX問合せのスクリプトは、クライアント・コンピュータまたはサーバー上に配置できます。

計算スクリプトを使用したデータ抽出

計算スクリプトは、Essbaseアプリケーションからデータを抽出するためのより高速なオプションです。ただし、計算スクリプトを使用してデータを抽出するには、次の制限事項に注意してください。

- 計算スクリプトを使用したデータ抽出は、BSOアプリケーションに対してのみサポートされます。
- 計算スクリプトを使用したデータ抽出は、Essbaseリリース9.3以上に対してのみサポートされます。
- DataExportDimHeaderオプションをONに設定します。
- 使用する場合は、DataExportColHeader設定をデータ列ディメンションと一致させます (複数のデータ列を抽出する場合)。
- データ抽出に使用されるOracle Data Integratorエージェントは、Essbaseサーバーと同じマシン上で稼働している必要があります。
- クライアント・コンピュータ上に存在する計算スクリプトにアクセスする場合は、ファイルへの完全修飾パス (C:¥Essbase_Samples¥Calc_Scripts¥calcall.cscなど) を指定する必要がある一方、サーバー上に存在する計算スクリプトにアクセスする場合は、ファイル名のみで十分です。

インタフェースの作成

Essbaseアプリケーションをモデルとしてリバースエンジニアリングすると、次の方法でこのモデルのデータストアを使用できます。

- データおよびメタデータをアプリケーションにロードするためのインタフェースのターゲットとして使用
- メタデータおよびデータをアプリケーションから抽出するためのインタフェースのソースとして使用

メタデータのロード

メタデータは、ディメンション・メンバーから構成されています。メンバー（メタデータ）は、メンバーのデータ値をロードする前にロードする必要があります。

メンバーをロードできるのは、Essbaseに存在するディメンションに対してのみです。ロードするディメンションごとに別個のインタフェースを使用する必要があります。インタフェースをチェーン化すると、一度に複数のディメンションにメタデータをロードできます。

▶ Essbase アプリケーションにメタデータをロードするには、次のようにします。

1 メタデータをロードするためのインタフェースを作成します。

インタフェースには任意の名前を付けることができます。インタフェースの作成手順は、『Oracle Data Integratorユーザーズ・ガイド』を参照してください。

2 ダイアグラムで、ターゲットのディメンションのデータストアをEssbaseモデルからドラッグ・アンド・ドロップします。

3 ソースのデータストアを定義します。

4 ソースとターゲットのデータ間にマッピングを定義します。

5 「フロー」で、次のようにします。

a. 「IKM SQL to Hyperion Essbase (METADATA)」が選択されていることを確認します。

b. ロード・オプションを指定します。詳細は、23ページの「[IKM SQL to Hyperion Essbase \(METADATA\)](#)」を参照してください。

6 「実行」をクリックします。

メタデータがアプリケーションにロードされます。

7 オペレータをチェックし、インタフェースが正常に実行されたことを確認します。

注意:

メタデータのデータストアは、メタデータ・ロードの実行に使用されるディメンション構築ルールと一致するように列を追加または削除して、変更することもできます。たとえば、デフォルトのデータストアにParentNameおよびChildName用の列がある場合に、ルールが世代別ディメンション構築ルールるとき、世代別ディメンション構築ルール内での列と一致するようにメタデータのデータストアを変更できます。サンプルのloadMarketsインタフェースは、世代別ディメンション構築ルールを使用してメタデータ・ロードを実行する例です。

IKM SQL to Hyperion Essbase (METADATA)

IKM SQL to Hyperion Essbase (METADATA)は、アダプタがEssbaseアプリケーションにメタデータをどのようにロードするかを定義するための、次のオプションをサポートします。

Account、Employee、Entitiesおよびユーザー定義のディメンションにデータをロードするための次の列は、アプリケーションがPlanningでのデータ・ロード用に設定されている場合に表示されます。

オプション	指定可能な値	説明
RULES_FILE	空白 (デフォルト)	メタデータをロードまたは構築するためのルール・ファイルを指定します。 ルール・ファイルがEssbaseサーバー上に存在する場合は、ファイル名のみを指定します。それ以外の場合は、Oracle Data Integratorエージェントに対する完全修飾ファイル名を指定します。
RULE_SEPARATOR	(デフォルト) R	(オプション) ルール・ファイルでのルール・セパレータを指定します。 有効値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> カンマ タブ 空白 カスタム文字 (@、#、^など)
RESTRUCTURE_DATABASE	<ul style="list-style-type: none"> KEEP_ALL_DATA (デフォルト) KEEP_INPUT_DATA KEEP_LEVEL0_DATA DISCARD_ALL_DATA 	Essbaseキューブでのメタデータのロード後にデータベースを再編成します。 有効値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> KEEP_ALL_DATA: すべてのデータを保存 KEEP_INPUT_DATA: 入力データのみ保存 KEEP_LEVEL0_DATA: レベル0データのみ保存 DISCARD_ALL_DATA: すべてのデータを廃棄 <p>注意: このオプションを適用できるのは、Essbaseリリース9.3以上です。Essbaseリリース9.3より前のリリースでは、このオプションは無視されます。</p>
PRE_LOAD_MAXL_SCRIPT	空白 (デフォルト)	このオプションは、Essbaseキューブにメタデータをロードする前にMAXLスクリプトを実行する場合に有効にします。 MAXLスクリプト・ファイルの完全修飾パス名を指定します。 注意: このオプションを正常に実行するには、EssbaseクライアントをOracle Data Integratorエージェントが稼働しているマシン上にインストールして構成する必要があります。

オプション	指定可能な値	説明
POST_LOAD_MAXL_SCRIPT	空白 (デフォルト)	<p>このオプションは、Essbaseキューブにメタデータをロードした後にMAXLスクリプトを実行する場合に有効にします。</p> <p>MAXLスクリプト・ファイルの完全修飾パス名を指定します。</p> <p>注意: このオプションを正常に実行するには、EssbaseクライアントをOracle Data Integratorエージェントが稼働しているマシン上にインストールして構成する必要があります。</p>
ABORT_ON_PRE_MAXL_ERROR	<ul style="list-style-type: none"> • No (デフォルト) • Yes 	<p>このオプションを適用できるのは、PRE_LOAD_MAXL_SCRIPTオプションが有効にされている場合のみです。</p> <p>ABORT_ON_PRE_MAXL_ERRORオプションをYesに設定すると、MAXLスクリプトの事前実行中にエラーが発生した時点で、ロード・プロセスは中断されます。</p>
LOG_ENABLED	<ul style="list-style-type: none"> • No (デフォルト) • Yes 	<p>このオプションをYesに設定すると、IKMプロセス中にLOG_FILE_NAMEオプションで指定されたファイルへのロギングが行われます。</p>
LOG_FILE_NAME	<pre><?=java.lang.System.getProperty("java.io.tmpdir")?>/Extract_<%=snprf.getFrom()%>.log</pre> (デフォルト)	<p>IKMプロセスのイベントを記録するファイル名を指定します。</p>
ERROR_LOG_FILENAME	<pre><?=java.lang.System.getProperty("java.io.tmpdir")?>/Extract_<%=snprf.getFrom()%>.err</pre> (デフォルト)	<p>IKMプロセスのエラー・レコードを記録するファイル名を指定します。</p>

データのロード

データは、選択したディメンション・メンバー（Essbaseですでに作成済）にロードできます。正常にデータをロードするには、すべての標準ディメンション・メンバーが必須であり、有効なメンバーである必要があります。データをロードするには、Essbaseアプリケーションを設定しておく必要があります。

また、ロード・ルールと一致するようにカスタム・ターゲットを作成できます。

データのロード前に、メンバー（メタデータ）がEssbaseディメンションに存在することを確認します。メンバーが欠落しているレコードの場合、データ・ロードは失敗し、その情報は（ロギングが有効である場合）エラー・レコードとして記録されます。データ・ロード・プロセスは、最大エラーしきい値に達するまで続行されます。

▶ Essbase アプリケーションにデータをロードするには、次のようにします。

1 データをロードするためのインターフェースを作成します。

インターフェースには任意の名前を付けることができます。インターフェースの作成手順は、『Oracle Data Integrator ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

2 ダイアグラムで、ターゲットのデータストアをEssbaseモデルからドラッグ・アンド・ドロップします。

3 ソースのデータストアを定義します。

4 ソースとターゲットのデータ間にマッピングを定義します。

5 「フロー」で、次のようにします。

- a. 「IKM SQL to Hyperion Essbase (DATA)」が選択されていることを確認します。
- b. ロード・オプションを指定します。詳細は、26ページの「[IKM SQL to Hyperion Essbase \(DATA\)](#)」を参照してください。

6 「実行」をクリックします。

データがアプリケーションにロードされます。

7 オペレータをチェックし、インターフェースが正常に実行されたことを確認します。

注意:

データのデータストアは、データ・ロードの実行に使用されるデータ・ロード・ルールと一致するように列を追加または削除して、変更することもできます。

IKM SQL to Hyperion Essbase (DATA)

IKM SQL to Hyperion Essbase (DATA)は、アダプタがEssbaseアプリケーションでデータをどのようにロードおよび統合するかを定義するための、次のオプションをサポートします。

オプション	指定可能な値	説明
RULES_FILE	空白 (デフォルト)	<p>(オプション) データ・ロードのパフォーマンスを向上させるためのルール・ファイルを指定します。</p> <p>ルール・ファイルがEssbaseサーバー上に存在しない場合は、完全修飾ファイル名を指定します。</p> <p>RULES_FILEオプションを指定しない場合は、APIベースのデータ・ロードが使用されます。しかし、APIを指定することはできません。</p>
RULE_SEPARATOR	, (デフォルト)	<p>(オプション) ルール・ファイルでのルール・セパレータを指定します。</p> <p>有効値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> カンマ タブ 空白 カスタム文字 (@、#、^など)
CLEAR_DATABASE	<ul style="list-style-type: none"> None (デフォルト) All Upper Blocks Non-Input Blocks 	<p>このオプションは、データをロードする前に、データをEssbaseキューブから消去する場合に有効にします。</p> <p>有効値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> None: データベースの消去は発生しません。 All: すべてのデータ・ブロックを消去します。 Upper Blocks: すべての統合レベルのブロックを消去します。 Non-Input Blocks: 計算から導出された値を含むブロックを消去します。 <p>注意: ASOアプリケーションの場合、Upper BlocksおよびNon-Input Blocksオプションは、適用できません。</p>
CALCULATION_SCRIPT	空白 (デフォルト)	<p>(オプション) Essbaseキューブにデータをロードした後に実行する計算スクリプトを指定します。</p> <p>計算スクリプトがEssbaseサーバー上に存在しない場合は、完全修飾ファイル名を指定します。</p>
RUN_CALC_SCRIPT_ONLY	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	<p>このオプションを適用できるのは、CALCULATION_SCRIPTオプションに計算スクリプトが指定されている場合のみです。</p> <p>RUN_CALC_SCRIPT_ONLYオプションをYesに設定すると、計算スクリプトのみが実行され、ターゲットのEssbaseキューブにデータはロードされません。</p>

オプション	指定可能な値	説明
PRE_LOAD_MAXL_SCRIPT	空白 (デフォルト)	<p>このオプションは、Essbaseキューブにデータをロードする前にMAXLスクリプトを実行する場合に有効にします。</p> <p>MAXLスクリプト・ファイルの完全修飾パス名を指定します。</p> <p>注意: EssbaseクライアントをOracle Data Integratorエージェントが稼働しているマシン上にインストールして構成する必要があります。</p>
POST_LOAD_MAXL_SCRIPT	空白 (デフォルト)	<p>このオプションは、Essbaseキューブにデータをロードした後にMAXLスクリプトを実行する場合に有効にします。</p> <p>MAXLスクリプト・ファイルの完全修飾パス名を指定します。</p> <p>注意: EssbaseクライアントをOracle Data Integratorエージェントが稼働しているマシン上にインストールして構成する必要があります。</p>
ABORT_ON_PRE_MAXL_ERROR	<ul style="list-style-type: none"> • No (デフォルト) • Yes 	<p>このオプションを適用できるのは、PRE_LOAD_MAXL_SCRIPTオプションが有効にされている場合のみです。</p> <p>ABORT_ON_PRE_MAXL_ERRORオプションをYesに設定すると、MAXLスクリプトの事前実行中にエラーが発生した時点で、ロード・プロセスは中断されます。</p>
MAXIMUM_ERRORS_ALLOWED	1 (デフォルト)	<p>このオプションは、データ・ロードの停止までに無視される最大エラー数を設定する場合に有効にします。</p> <p>ここで指定する値は、データ・ロード・プロセス中に発生するエラー・レコードのしきい値です。しきい値に達すると、データ・ロード・プロセスは中断されます。たとえば、デフォルト値1は、エラー・レコードが1件発生した時点で、データ・ロード・プロセスが停止することを意味します。値5を指定すると、5件目のエラー・レコードが発生した時点で、データ・ロード・プロセスは停止します。値0 (すなわち無限大) を指定すると、データ・ロード・プロセスは、エラー・レコードが発生した後も続行されます。</p>
COMMIT_INTERVAL	1000 (デフォルト)	<p>コミット間隔とは、完全なバッチで、Essbaseキューブにロードされるレコードのチャンク・サイズです。</p> <p>このオプションは、Essbaseキューブのレコードに対してコミット間隔を設定する場合に有効にします。</p> <p>コミット間隔を変更すると、Essbaseデータベースの設計に基づいて、データ・ロードのパフォーマンスが向上することがあります。</p>
LOG_ENABLED	<ul style="list-style-type: none"> • No (デフォルト) • Yes 	<p>このオプションをYesに設定すると、IKMプロセス中にLOG_FILENAMEオプションで指定されたファイルへのログギングが行われます。</p>

オプション	指定可能な値	説明
LOG_FILENAME	<?=java.lang.System.getProperty("java.io.tmpdir")?/<%=snpRef.getTargetTable("RES_NAME")%>.log (デフォルト)	IKMプロセスのイベントを記録するファイル名を指定します。
LOG_ERRORS	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	このオプションをYesに設定すると、IKMプロセス中にERROR_LOG_FILENAMEオプションで指定されたファイルにエラー・コードの詳細が記録されます。
ERROR_LOG_FILENAME	<?=java.lang.System.getProperty("java.io.tmpdir")?/><%=snpRef.getTargetTable("RES_NAME")%>.err	IKMプロセスのエラー・レコードの詳細を記録するファイル名を指定します。
ERR_LOG_HEADER_ROW	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	このオプションをYesに設定すると、列名を含むヘッダー行がエラー・レコード・ファイルに記録されます。
ERR_COL_DELIMITER	, (デフォルト)	エラー・レコード・ファイルに使用される列デリミタを指定します。
ERR_ROW_DELIMITER	\r\n (デフォルト)	エラー・レコード・ファイルに使用される行デリミタを指定します。
ERR_TEXT_DELIMITER	' (デフォルト)	エラー・レコード・ファイルで列データに使用されるテキスト・デリミタを指定します。 たとえば、テキスト・デリミタを'"' (二重引用符)と設定すると、エラー・レコード・ファイル内のすべての列が二重引用符で区切られます。

データの抽出

Essbaseに存在する、選択したディメンション・メンバーのデータを抽出できます。データを抽出するには、Essbaseアプリケーションを設定しておく必要があります。

- ▶ Oracle Data Integrator で Essbase アプリケーションからデータを抽出するには、次のようにします。
 - 1 データを抽出するためのインタフェースを作成します。

インタフェースには任意の名前を付けることができます。インタフェースの作成手順は、『Oracle Data Integratorユーザーズ・ガイド』を参照してください。
 - 2 ダイアグラムで、ソースのデータストアをEssbaseモデルからドラッグ・アンド・ドロップします。
 - 3 ターゲットのデータストアを定義します。
 - 4 ソースとターゲットのデータ間にマッピングを定義します。
 - 5 「フロー」タブで、次のようにします。
 - a. 「LKM Hyperion Essbase (DATA) to SQL」が選択されていることを確認します。
 - b. 抽出オプションを指定します。詳細は、30ページの「[LKM Hyperion Essbase DATA to SQL](#)」を参照してください。
 - 6 「実行」をクリックします。

データがステージング領域に抽出されます。
 - 7 オペレータをチェックし、インタフェースが正常に実行されたことを確認します。

LKM Hyperion Essbase DATA to SQL

LKM Hyperion Essbase DATA to SQLは、Oracle Data Integrator Adapter for Hyperion Essbaseがデータをどのように抽出するかを定義するための、次のオプションをサポートします。

オプション	指定可能な値	説明
PRE_CALCULATION_SCRIPT	空白 (デフォルト)	(オプション) Essbaseキューブからデータを抽出する前に実行する計算スクリプトを指定します。
EXTRACTION_QUERY_TYPE	<ul style="list-style-type: none"> ReportScript (デフォルト) MDXQuery CalcScript 	<p>抽出問合せタイプ (レポート・スクリプト、MDX問合せ、計算スクリプト) を指定します。</p> <p>すべてのデータをフェッチして出力列を埋める、有効な抽出問合せを指定します。</p> <p>最初のレコード (計算スクリプトの場合は最初の2レコード) には、抽出されるデータのメタ情報が含まれます。</p>
EXTRACTION_QUERY_FILE	空白 (デフォルト)	抽出問合せの完全修飾ファイル名を指定します。
EXT_COL_DELIMITER	\t (デフォルト)	<p>抽出問合せに使用される列デリミタを指定します。</p> <p>このオプションに値を指定しない場合は、空白 (" ") が列デリミタとみなされます。</p>
EXTRACT_DATA_FILE_IN_CALC_SCRIPT	空白 (デフォルト)	<p>このオプションを適用できるのは、EXTRACTION_QUERY_TYPEオプションで問合せタイプがCalcScriptと指定されている場合のみです。</p> <p>計算スクリプトによりデータが抽出される、完全修飾ファイルの場所を指定します。</p>
PRE_EXTRACT_MAXL	空白 (デフォルト)	このオプションは、Essbaseキューブからデータを抽出する前にMAXLスクリプトを実行する場合に有効にします。
POST_EXTRACT_MAXL	空白 (デフォルト)	このオプションは、Essbaseキューブからデータを抽出した後にMAXLスクリプトを実行する場合に有効にします。
ABORT_ON_PRE_MAXL_ERROR	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	<p>このオプションを適用できるのは、PRE_EXTRACT_MAXLオプションが有効にされている場合のみです。</p> <p>ABORT_ON_PRE_MAXL_ERRORオプションをYesに設定すると、MAXLスクリプトの事前実行中にエラーが発生した時点で、ロード・プロセスは中断されます。</p>
LOG_ENABLED	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	このオプションをYesに設定すると、LKMプロセス中にLOG_FILE_NAMEオプションで指定されたファイルへのロギングが行われます。

オプション	指定可能な値	説明
LOG_FILE_NAME	<?=java.lang.System.getProperty(java.io.tmpdir)?>/Extract_<%=snpRef.getFrom()%>.log (デフォルト)	LKMプロセスのイベントを記録するファイル名を指定します。
MAXIMUM_ERRORS_ALLOWED	1 (デフォルト)	このオプションは、抽出の停止までに無視される最大エラー数を設定する場合に有効にします。
LOG_ERRORS	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	このオプションをYesに設定すると、LKMプロセス中にERROR_LOG_FILENAMEオプションで指定されたファイルにエラー・コードの詳細が記録されます。
ERROR_LOG_FILENAME	<?=java.lang.System.getProperty(java.io.tmpdir)?>/Extract_<%=snpRef.getFrom()%>.err	LKMプロセスのエラー・レコードの詳細を記録するファイル名を指定します。
ERR_LOG_HEADER_ROW	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	このオプションをYesに設定すると、列名を含むヘッダ行がエラー・レコード・ファイルに記録されます。
ERR_COL_DELIMITER	, (デフォルト)	エラー・レコード・ファイルに使用される列デリミタを指定します。
ERR_ROW_DELIMITER	\r\n (デフォルト)	エラー・レコード・ファイルに使用される行デリミタを指定します。
ERR_TEXT_DELIMITER	" (デフォルト)	エラー・レコード・ファイルで列データに使用されるテキスト・デリミタを指定します。 たとえば、テキスト・デリミタを'"'"' (二重引用符) と設定すると、エラー・レコード・ファイル内のすべての列が二重引用符で区切られます。
DELETE_TEMPORARY_OBJECTS	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	統合後に一時オブジェクト (表、ファイルおよびスクリプト) を保持するには、このオプションをNoに設定します。 このオプションは、デバッグに役立ちます。

メタデータからのメンバーの抽出

Essbaseアプリケーションの、選択したディメンションからメンバーを抽出できます。ディメンションからメンバーを抽出するには、Essbaseアプリケーションを設定し、メタデータをロードしておく必要があります。

ディメンションからメンバーを抽出する前に、ディメンションがEssbaseデータベースに存在することを確認します。最上位メンバーがディメンションに存在しない場合、レコードは抽出されません。

- ▶ Oracle Data Integrator で Essbase アプリケーションのディメンションからメンバーを抽出するには、次のようにします。
 - 1 メタデータをロードするためのインタフェースを作成します。

インタフェースには任意の名前を付けることができます。インタフェースの作成手順は、『Oracle Data Integratorユーザーズ・ガイド』を参照してください。
 - 2 ダイアグラムで、ソースのディメンションのデータストアをEssbaseモデルからドラッグ・アンド・ドロップします。
 - 3 ターゲットのデータストアを定義します。
 - 4 ソースとターゲットのデータ間にマッピングを定義します。
 - 5 「フロー」で、次のようにします。
 - a. 「LKM Hyperion Essbase (METADATA) to SQL」が選択されていることを確認します。
 - b. 抽出オプションを指定します。詳細は、33ページの「[LKM Hyperion Essbase METADATA to SQL](#)」を参照してください。
 - 6 「実行」をクリックします。

メタデータがアプリケーションにロードされます。
 - 7 オペレータをチェックし、インタフェースが正常に実行されたことを確認します。

LKM Hyperion Essbase METADATA to SQL

LKM Hyperion Essbase METADATA to SQLは、OracleのHyperion Essbase - System 9用のData Integrator Adapterがディメンション・メンバーをどのように抽出するかを定義するための、次のオプションをサポートします。

オプション	指定可能な値	説明
MEMBER_FILTER_CRITERIA	IDescendants (デフォルト)	このオプションは、ディメンション階層から抽出するメンバーを選択する場合に有効にします。次の選択基準を指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> IDescendants Descendants IChildren Children Member_Only Level0 UDA
MEMBER_FILTER_VALUE	空白 (デフォルト)	このオプションは、指定したフィルタ基準を適用するメンバー名を指定する場合に有効にします。メンバーを指定しない場合、フィルタ基準はルート・ディメンション・メンバーに適用されます。 MEMBER_FILTER_CRITERIA値がMEMBER_ONLYまたはUDAの場合、MEMBER_FILTER_VALUEオプションは必須で、空の文字列を指定することはできません。
LOG_ENABLED	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	このオプションをYesに設定すると、LKMプロセス中にLOG_FILE_NAMEオプションで指定されたファイルへのロギングが行われます。
LOG_FILE_NAME	<?=java.lang.System.getenvProperty("java.io.tmpdir")?>/Extract_<%=snpRef.getFrom()%>.log	LKMプロセスのイベントを記録するファイル名を指定します。
MAXIMUM_ERRORS_ALLOWED	1 (デフォルト)	このオプションは、抽出の停止までに無視される最大エラー数を設定する場合に有効にします。
LOG_ERRORS	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	このオプションをYesに設定すると、LKMプロセス中にERROR_LOG_FILENAMEオプションで指定されたファイルにエラー・コードの詳細が記録されます。
ERROR_LOG_FILENAME	<?=java.lang.System.getenvProperty("java.io.tmpdir")?>/Extract_<%=snpRef.getFrom()%>.err	LKMプロセスのエラー・レコードの詳細を記録するファイル名を指定します。
ERR_LOG_HEADER_ROW	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	このオプションをYesに設定すると、列名を含むヘッダー行がエラー・レコード・ファイルに記録されます。
ERR_COL_DELIMITER	, (デフォルト)	エラー・レコード・ファイルに使用される列デリミタを指定します。

オプション	指定可能な値	説明
ERR_ROW_DELIMITER	\r\n (デフォルト)	エラー・レコード・ファイルに使用される行デリミタを指定します。
ERR_TEXT_DELIMITER	<ul style="list-style-type: none"> 空白 (デフォルト) "\" 	エラー・レコード・ファイルでデータ列に使用されるテキスト・デリミタを指定します。たとえば、テキスト・デリミタを'"' (二重引用符) と設定すると、エラー・レコード・ファイル内のすべての列が二重引用符で区切られます。
DELETE_TEMPORARY_OBJECTS	<ul style="list-style-type: none"> No (デフォルト) Yes 	<p>統合後に一時オブジェクト (表、ファイルおよびスクリプト) を保持するには、このオプションをNoに設定します。</p> <p>このオプションは、デバッグに役立ちます。</p>